

帰牛原遺跡群

昭和55年度 帰牛原畑灌水工事
埋蔵文化財立合調査報告書

1982. 2

長野県南信土地改良事務所

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

帰牛原遺跡群

昭和55年度 帰牛原畑灌水工事
埋蔵文化財立合調査報告書

1982.2

長野県南信土地改良事務所
長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

県営畠地帯総合土地改良事業として、小波川の水を取水して電東一貫水路とし、中段地帯の畠地へ灌水して農業の近代化を図る散水施設工事が年次計画の下に、喬木村においては伊久間原に統いて今回中原帰牛原地区で工事を実施いたしました。

この地区は帰牛原遺跡として重要な文化財包蔵地であるため文化財保護の見地から喬木村教育委員会に委託し遺跡の立合調査を行なったものであります。

今回の調査は時期が2月から3月にかけての厳寒期であったことや、果樹園、桑園地帯である為、凍った土や樹間の狭い溝の中での作業で調査に困難が伴なつたけれども、綿密なる調査によって帰牛原遺跡の全容を確認することが出来、多大の成果を収め得ることが出来たことは誠に意義深く慶びとするところであります。

伊久間原に統いて今回の帰牛原遺跡の報告書が出版されて記録保存がなされ、喬木村中段地帯の文化財調査と保護が出来たことの意義を高く評価すると共に調査に当られた佐藤魁信調査団長をはじめ関係各位のご努力に謝意を表し序といたします。

昭和57年2月

長野県南信土地改良事務所

下伊那支所長

田 中 幸 男

例　　言

1. 本書は帰牛原畠地帯 17 ha にわたる灌漑水工事に伴う立合調査を行った帰牛原遺跡群の報告書である。
2. 本書は帰牛原における昭和45年・46年・51年・52年・54年度の5次にわたる南原・中原・城本屋・十
万山地区等の調査結果を踏まえて編集し「帰牛原遺跡群」とした。
3. 立合調査は、灌水管溝は幅50cm、幹線幅70cm、深さ75cmが15m間隔に掘られ、その溝内の調査による
もので、ローム層中の黒土の落ちこみと、遺物の検出によって遺構の存在を確認したものである。遺構
確認位置を図7・8・9と表1に記載した。
4. 配管溝は機械による掘削のため、出土土器の大半は小片となり、また1遺構の遺物出土量も少ない。
遺物の図示は主なものとどめた。
5. 本書の編集及び執筆は佐藤が担当した。
6. 写真は佐藤、遺構位置図、遺物の作図は佐藤、製図は田口が分担した。
7. 遺物は番木村歴史資料館に保管してある。

目 次

序	1
例 言	2
目 次	3
地図目次	4
I 環 境	5
1. 自然的環境	5
2. 歴史的環境	6
II 調査経過	8
(I) 報牛原における発掘調査	8
(II) 立合調査	11
立合調査日誌	11
III 立合調査結果	14
報牛原畑灌水工事立合調査遺構確認位置図 I・II・III (1 : 2,000)	15
遺構確認表 (表 1)	18
1. 繩文時代	23
2. 弥生時代	24
3. 古墳時代・平安時代・中世	24
報牛原畑灌水配管区分・時代別遺構検出一覧表 (表 2)	25
報牛原遺跡群地形詳細図・主要配管区位置及び周辺遺跡図 (1 : 7,500)	27
IV ま と め	26
遺 物 図	30
図 版	
調査組織	
おわりに	

挿 図 目 次

図1	帰牛原遺跡群位置図及び周辺主要遺跡図 (1 : 5,000)	5
図2	帰牛原I号(12号)方形周溝墓	7
図3	" II号(6号)円形周溝墓	7
図4	帰牛原南原方形周溝墓群	9
図5	帰牛原城本遺跡遺構分布図	9
図6	" 十万山地区遺構分布図	10
図7	帰牛原灌水工事立合調査遺構確認位置図 I (1 : 2,000)	15
図8	" II (1 : 2,000)	17
図9	" III (1 : 2,000)	17
図10	十万山地区出土繩文中期中葉末土器 (1 : 4)	30
図11	城本屋地区出土繩文中期後半Ⅲ期土器 (1 : 4)	31
図12	" 土器 (1 : 4) 繩文中期後半IV期・V期・繩文後期・平安時代	32
図13	帰牛原遺跡出土弥生中期・後期遺物	33
図14	十万山地区弥生後期遺物	34
図15	帰牛原灌水工事立合調査出土繩文時代遺物 (1 : 4)	35
図16	帰牛原灌水工事立合調査出土繩文中、後期石器 (1 : 4)	36
図17	" 弥生後期遺物 (1 : 4)	37
図18	帰牛原遺跡群地形詳細図、主要配管区位置及び周辺遺跡図 (1 : 7,500)	27

I 環境

1. 自然的環境

帰牛原遺跡は長野県下伊那郡喬木村帰牛原に所在する。(図1)

長野県飯田・下伊那地方は東に赤石山脈、西に木曽山脈が連なり、その中央を天竜川が南流し、両岸に河岸段丘が発達しているのが伊那盆地である。天竜川の東岸一竜東地区は背後には赤石山脈の前面に中山性の伊那山脈が大西山(1741m)・鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面が発達し、天竜川の氾濫原へとさがっている。天竜川の西岸一竜西地区に比し山麓からのびる扇状地は狭小で幅員も全般的に狭いが、豊丘村から喬木村にかけての段丘の発達は著しく、特に北から豊丘村の三次原・田村原・伴野原、喬木村の城原・帰牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と統く中位段丘面の幅は広く典型的な段丘を形成している。



図1 帰牛原遺跡群位置図及び周辺主要遺跡図(1:5,000)

遺跡の所在する帰牛原は東西に近い方向（段丘面の中心線はN 70°Wを指す）に連なる段丘で標高490～530mの伊那谷洪積中位段丘に位置づく。北には加々須川が流れ、西は天竜川の氾濫原をのぞみ、南は小川川の支流の鞍馬沢が流れおり、川との高差は35～77mに達し、段丘形成後の浸蝕が盛んであったことを物語っている。東方は伊那層よりなる丘陵となり、その一部が十万山として南側の鞍馬沢に沿って西にのびてきている。丘陵地と段丘面の東西は1700m、南北の最大幅は550mを測り、台地のほぼ中間部はくびれて狭くなり、南北幅は250mとなる。このくびれ部の北東瀧ノ沢の崖端浸蝕による深い谷によって切られた舌状台地に城本屋遺跡があり、くびれ部の東一十万山西据より城本屋の東側は一段高位の扇状地形を形成し、水田化されている。十万山西据には帰牛原遺跡十万山地区がある。くびれ部の西は中央部はやや低地帯となって東西に走り、その先端部は崖頭浸蝕による深い谷となり、南原と中原とに分かれている。南側は南原遺跡、北側は中原遺跡となっている。

この低地帯は瀧ノ沢の崖端浸蝕進行前は、東方の丘陵地帯よりの湧水の流路をなしていたものと推定される。城本屋遺跡の発掘調査によって集落の南端の縄文中期後半末の住居址が瀧ノ沢の氾濫によって切られれていることが認められており、それ以後の流路の変化と思われる。帰牛原遺跡における集落は、この低地帯をはさんで展開されている。

帰牛原には城本屋・十万山地区・中原・南原と遺跡はあるが、同一段丘上に立地し、関連しあう遺跡であり、帰牛原遺跡群と総称するが妥当である。

2 歴史的環境

帰牛原における発掘調査は昭和45年度に農道開設工事に伴う調査が、昭和48年3月喬木第一小学校建設用地内調査が南原遺跡で、昭和51年に城本屋遺跡の農業構造改良事業に伴う発掘調査がなされ、昭和52年に十万山地区的調査が実施され、多くの各期にわたる遺構・遺物が発見されている。これは後の項で述べることにする。台地の西端部に中原2号墳があり、径7m・高さ2mの墳丘が現存しており、ここより埴輪片・直刀・須恵器が出土したと「下伊那史第三卷」に記載されている。この南側に中原1号墳があったが消滅して、その跡はない。台地の北側の段丘崖中腹には郭5号墳があり、道路工事中に朝顔花形円筒埴輪の出土をみたが、僅かにその跡をとどめているにすぎない。

帰牛原周辺の遺跡を概観すると、同位段丘面では、北にある城原遺跡は弥生後期の土器が瓦土を探る際に多くの出土をみており、その台地先端部には中世の城原城跡がある。北に続く伴野原・林原・田村原は各時代にわたる集落が発掘調査され、主要な遺跡として知られており、特に伴野原遺跡はパン状炭化物の出土で注目をあびている。

南の同位段丘面では小川川を隔てた伊久間原遺跡群は縄文時代では早・前・中・後晩期、弥生時代中・後期、古墳時代の前・中・後期から平安時代と続く大遺跡で、調査された住居址は380余軒ある。

帰牛原段丘崖下には、北に旧喬木第一小学校（現保育園）の郭遺跡では縄文中期後半の完形土器の出土をみ、後期掘之内式土器の多くの出土があり、公民館建設時の立合調査では縄文中期後半の住居址5軒の存在が確かめられ、保育園建設時立合調査では弥生中期寺所式住居址・阿島式土器を伴う土壙が検出されている。この台地先端部には竜東地区唯一の前方後円墳郭1号古墳が現存している。加々須川北岸の低位冲積段丘の阿島遺跡は弥生中期阿島式土器の標準遺跡である。

加々須川南岸低位冲積段丘面よりは古い須恵器・土師器の出土をみており、未調査であるが注意すべき加々須川以南下段地域遺跡である。帰牛原の南段丘崖下には里原・馬場平・田本平遺跡と続き、特に馬場平遺跡では縄文前期から中期・後・晩期、弥生中・後期、古墳時代の遺物の多くが中学校建設時に出土し



图2 烟牛原Ⅰ号（12号）方形周溝墓

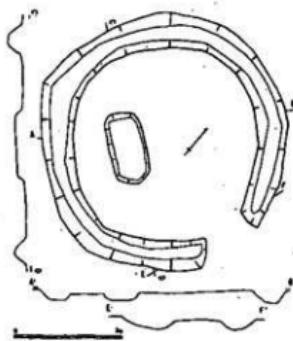


图3 烟牛原Ⅱ号（6号）円形周溝墓

ている。

喬木村の富田地区を除く古墳は37基、そのうち16基は低位段丘面にあり、郭・里原・馬場平にある。その他古墳は段丘上・段丘崖腹にある。現存する古墳は少なく郭1号墳は前方部を欠き、小川塚穴古墳は封土は崩され石室を露出している。里原1号墳・杉立古墳・赤坂古墳は墳丘を僅かに残す状態である。大原段丘端部にある奴山古墳群は6基の中、3基が現存し、古墳群の形態を残すものとして注目される。消滅古墳を含めてこれら古墳より形象埴輪片・円筒埴輪・鏡・玉類・刀劍・金銅装馬具類の出土をみたものもあり、竜東地区古墳文化の中心地であったであろうことも推測される。

II. 調査経過

(I) 帰牛原における発掘調査

帰牛原遺跡の発掘調査は5次にわたって行われ、多くの成果をあげて注目されている。

1. 第1次調査(注1)

昭和45年度農業構造改良事業の一環として、中原・南原に農道が開設されることになり、農道用地内の遺物分布密度の高い地点に重点をおいて発掘調査したものである。調査は10月28日～11月12日の30日間にわたるものであった。

＜調査結果＞

十万山地区 住居址3軒・土壤1を調査。住居址2軒は縄文中期中葉井戸尻Ⅲ式に比定されるもので、深鉢・土偶頭部・ミニチュア土器・石器類の多くが検出されている。1軒は弥生後期中島式住居址で壺・壺・高坏の出土(図) をみる。土壤は寺所式土器(図13の1～15)を伴うものとし注目される。

中原地区 方形・円形周溝墓各1基と土壤2が発見され、注目された。(図2・3)

南原地区 土壤6基が検出されたが、その時期を決める遺物の出土はみられなかった。

2. 第2次調査(注2)

昭和47年度喬木第1小学校建設用地が南原の西端部に決定され、このため用地内の遺物分布調査を行ない、重点調査区を決定した。48年2月21日より3月7日の延べ12日間の発掘調査を実施した。

＜調査結果＞

北西の段丘縁部に方形周溝墓群(図4)が発見され、5基の周溝墓と西に向う溝であるが、この溝は方形周溝墓になるものとみられた。主体部よりの遺物はなく、いずれも周溝内の遺物で、弥生後期中島式である。特に1号周溝墓東溝よりは壺2個体が横倒しとなって出土をみ注目された。これらの他に縄文晩期の条痕文土器を伴う住居址1軒が調査された。

3. 第3次調査(注3)

昭和51年度、農業構造改良事業は城本屋遺跡の中心部南側にかけて実施され、これに伴う発掘調査である。調査は昭和51年7月20日から9月7日までの39日間と、11月8日より11月19日の10日間に行われた。

<調査結果>

縄文中期後半の大集落(図5)の存在が確かめられ、後半Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期にわたり45軒の住居址が切あい重複して検出され、遺物の出土量は多く、中期後半を知る好資料(図11・12)を得ている。その他縄文後期住居址3、弥生時代住居址2、平安時代住居址1、柱列址・土壙・貯蔵穴・祭祀状造構等が調査されている。

4. 第4次調査(注4)

昭和52年度、帰牛原農業改良事業は十万山西据の遺跡の中心部にかか

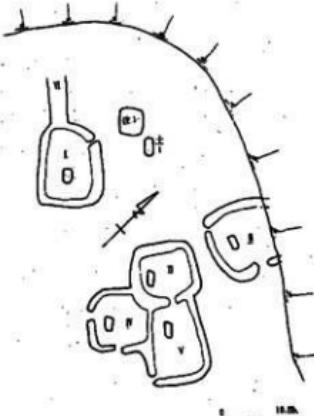


図4 帰牛原南原方形周溝基群



図5 帰牛原城本遺跡遺構図

り、それに伴う発掘調査を作物等の関係で一部を調査したものである。桑の抜根を主にし、基盤整備に重点が置かれず、遺跡の破壊は最小限度におさえられたものである。調査は昭和52年11月5日より11月22日の15日間に行なわれた。

＜調査結果＞

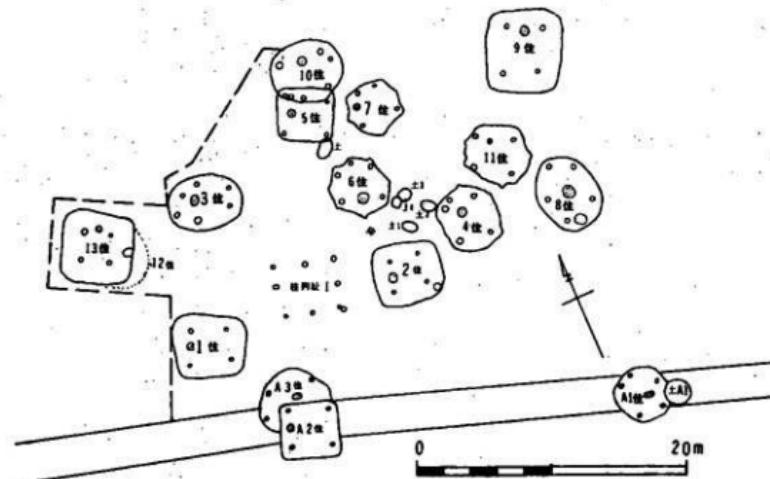


図6 堀牛原十万山地区遺構図

縄文中期中葉末住居址8軒、弥生後期住居址5軒、柱列址1、土塁5が発掘調査された。(図6) 縄文中期中葉の住居址の炉址は小形の浅い掘りこみの石囲炉であり、中期後半の大形の深い炉址はみられず、住居址の壁に数か所に突出部をもつ等のはっきりした中期後半との相違がみられている。土器は細い粘土紐の貼布による一細縦線文土器を主体にするが、井戸尻式に比定される土器伴う。(図10) 炉址の小形からみると中期中葉から後半への移行を示す時期の土器群とみられる好資料の出土をみている。

弥生時代後期住居址は中島式であり、大形壺は小片のみ、壺は多く、中島式の前半と後半とみる2時期の住居址が認められ、高壺・小形壺があり、長床式に比定される台付小形壺・6孔をもつ銅鏡の出土は注目される。(図14) 石器は少なく、石鋸2・有肩扁状形石器1・打製石庖丁2・磨製石庖丁1・大形砥石1・環石1の出土をみたのみで、石器の減少を示すものである。

5. 第5次調査

昭和54年度事業に中原地区の1画 - 小学校よりの道路を北に、中央部低地帯をこえた東側に水道貯水タンクが建設されることになり、これに先立つ調査が6月21日～23日の4日間行なわれ、円形周溝墓(5号)の約2分の1と、弥生後期住居址(26号)の約4分の1が検出発掘調査された。

6. 第6次調査

昭和56年度喬木中学校建設用地が喬木第一小学校の東側に統合して建設されることになり、今年度中に造成工事が行われることになり、これに先立って用地内の発掘調査を7月10日より、7月20日までの9日間実施したもので、これについての報告は別に記することにした。

- 注1. 喬木村教育委員会「帰牛原」 1971・3
- 注2. " " 「帰牛原南原遺跡」 1973・3
- 注3. " " 「帰牛原城本屋」 1977・3
- 注4. " " 「帰牛原遺跡十万山地区」 1979・11

(II) 立合調査

昭和55年度、帰牛原畠地帯総合改良事業は帰牛原西側畠地帯全域に灌水工事を行うことになり、それに伴う立合調査が、南信土地改良事務所の委託により、喬木村教育委員会が調査を実施したものである。中学校建設用地買収の決定がおくれ、工事施工は昭和56年1月末になって、ようやく開始された。調査は2月4日から4月22日にいたるまでかかって全区域を完了したものである。

立合調査日誌

- 1月30日 帰牛原工区畠灌水工事について南信土地改良事務所・喬木村教育委員会・工事請負業者平和工業KKと立合調査担当者による調査について話し合い。調査準備をする。
- 2月4日(晴) A10区本幹調査 A1号住居址・A1号土坑検出。
- 2月5日(晴) B7区調査 - B1号・2号・3号・4号住居址検出。
- 2月6日(晴) うすぐもり、終日凍る) B5・7区調査
 - B7区 - B5号・8号・9号・10号・11号・12号住居址検出
 - B5区 - B6号・7号住居址検出。
- 本線B18調査 遺構なし。
- 2月9日(晴) B5・B7・B8区・B13の本線調査
 - B7区 - 溝Ⅱとみるがあるが、はっきりしない。
 - B5区 - 遺構なし。 B13の本線遺構なし。
 - B8区 - B13住居址検出。
- 2月10日(晴) 午後おそくより雪荒れ) テント設営
 - B5・B8区 - B13・B19の本線調査
 - B5区 - B14号住居址・B15号住居址検出
 - B13・19の本線に方形周溝墓1号検出。
- 2月12日(晴) B10区・B11区調査
 - B11区 - 方形周溝墓2・3号検出
 - B11区 - B16号・17号・18号・19号・20号住居址検出
 - B10区 - 方形周溝墓4号検出
 - " B21号・22号・23号・24号・25号住居址検出

- 2月14日（くもり・晴） 本線3号・B11区・B13区調査
本線3号 - A2号・A3号住居址検出
" 方形周溝墓16号検出（Noを誤り訂正）
• B11区 - 方形周溝墓6号（一次調査の中原1号の位置確認）
" " 5号（水道建設時調査の位置確認—中原Ⅲ号）
" - B26号住居址検出
• B13区 - 方形周溝墓7号検出
- 2月16日（くもり） B12区・B17区・B13区・B9区調査
• B12区 - B27号住居址検出
• B13区 - 方形周溝墓8号・9号検出
• B17区 - 土坑B1号検出
• B9区 - 遺構なし。
- 2月17日（雪） 遺構図、遺物整理
- 2月19日（朝雨・くもり） B6区調査
• B6区 - B28号・29号住居址検出
- 2月20日（朝雨・晴） B6区・B11区再調査
• B6区 - B30号住居址検出、B11区縄文土器片多く表採する。
- 2月22日（くもり） A6号本線調査
• A6区 - A5号住居址検出
- （2月23日より悪天候が続き、また-10℃以下の気候の日も続き、工事は他地区に移り、中止状態となり、3月3日まで休み）
- 3月4日（朝まで雨・くもり） B6区・B14区調査
• B6区 - B22号住居址検出
• B14区 - B33号 "
- 3月6日（雪あれ） B14区調査
• B14区 - 方形周溝墓10号検出
" - 土坑B2号・3号検出
- 3月7日（晴） B17区・B1区調査
• B17区 - B33号・B34号住居址、土坑B4号・5号検出
• B1区 - 方形周溝墓11号・12号・J3号検出
- 3月8日（晴） B1区・B15区・B18区調査
• B1区 - 方形周溝墓14号・15号検出
• B15区・B18区 遺構なし
- 3月10日（晴） B20区・B16区調査
• B16区 - B35号住居址・土坑6号検出
• B20区 - 遺構なし
- 3月11日（晴） B3区調査
• B3区 - 方形周溝墓 17号・18号・19号・20号検出
- 3月12日（晴） B3区調査
• B3区 - 方形周溝墓 21号・22号検出

- B 3 区 - 焼土堅穴検出
- 3月13日（くもり） B 3 区・B 2 区・B 19区・B 18区調査
 - B 3 区 - 方形周溝墓、24号検出
 - B 2 区 - 方形周溝墓 23号検出
 - B 19区 - 郷 5号古墳周溝調査、上段部に遺構なし。
 - B 18区 - 遺構なし。
- 3月14日（雨・くもり） B 4 区・B 2 区調査
 - B 4 区 - 方形周溝墓 25号検出
 - B 2 区 - " 26号検出
- 3月15日（雨） 遺構図・遺物整理
- 3月16日（晴・強風寒い） B 2 区調査
 - B 2 区 - 方形周溝墓 27号検出
- 3月17日（晴） B 3 区・B 4 区調査
 - B 3 区 - 焼土堅穴の周辺拡張調査、深さ 120cmまで焼土、性格不明。
- 3月18日（晴） A 20区・A 19区調査
 - A 20区 - 方形周溝墓28号・29号・30号検出
 - A 19区 - " 31号・32号・33号検出
- 3月19日（晴） A 19区調査・A 9 区調査
 - A 19区 - A 4 号住居址検出
 - A 9 区 - A 6 号・7 号・8 号住居址、土坑 A 2 号検出
- 3月20日（朝まで雨・晴） A 9 号・A 11区の調査
 - A 9 区 - A 9 号住居址検出
 - A 11区 - A 10号・11号・12号住居址検出
- 3月22日（早朝まで雨） A 9 区・A 11区調査
 - A 11区 - A 溝址 I を東西 2 本の線に検出、東西方向に幅 1.8 m、深さ 90cm の大きな溝であり、今後の調査を要す。
- 3月23日（晴） A 11区・A 9 区
 - A 11区 - A 13号住居址検出
 - A 9 区 - A 14号住居址・土坑 A 3 号検出
- 3月24日（晴・くもり） A 8 区調査
 - A 8 区 - A 15号住居址・A 溝 II を検出
- 3月25日（雨） 遺構図・遺物整理・概報作製
- 3月26日（くもり・雨） 概報作成
- 3月27日（晴） A 8 区調査
 - A 8 区 - A 16号・A 17号・A 18号住居址検出
- 3月28日（晴） A 10区調査
 - A 10区 - A 19号・20号住居址、A 土坑 4 号、溝 I の連がり検出
- 3月30日（くもり） A 10区調査
 - A 10区 - A 21号・22号・23号・25号・26号住居址検出
溝 I のつながり検出

3月31日（くもり・雨） A10区調査

• A10区 - A27号住居址検出、A25号住居址再調査

4月4日（くもり・雨） A10区・A7区調査

• A10区 - A28号住居址検出、溝Iの連続を検出

• A7区 - A29号・30号・31号・32号住居址検出、溝I連続する

A土坑5号検出

4月8日（晴・くもり） A20区残り一部・A6区調査

• A20区 - 方形周溝墓28号の北端溝検出

• A6区 - A33号・34号・35号検出

4月13日（くもり） A5区・A2区・A4区調査

• A5区・A2区・A4区-遺構なし。

4月18日（晴） A1区・A3区調査

• A1区・A3区遺構なし

4月22日（晴） A17区調査

• A17区 - A36号・37号・38号住居址検出

・全区域立合調査を完了する。

III 立 合 調 査 結 果

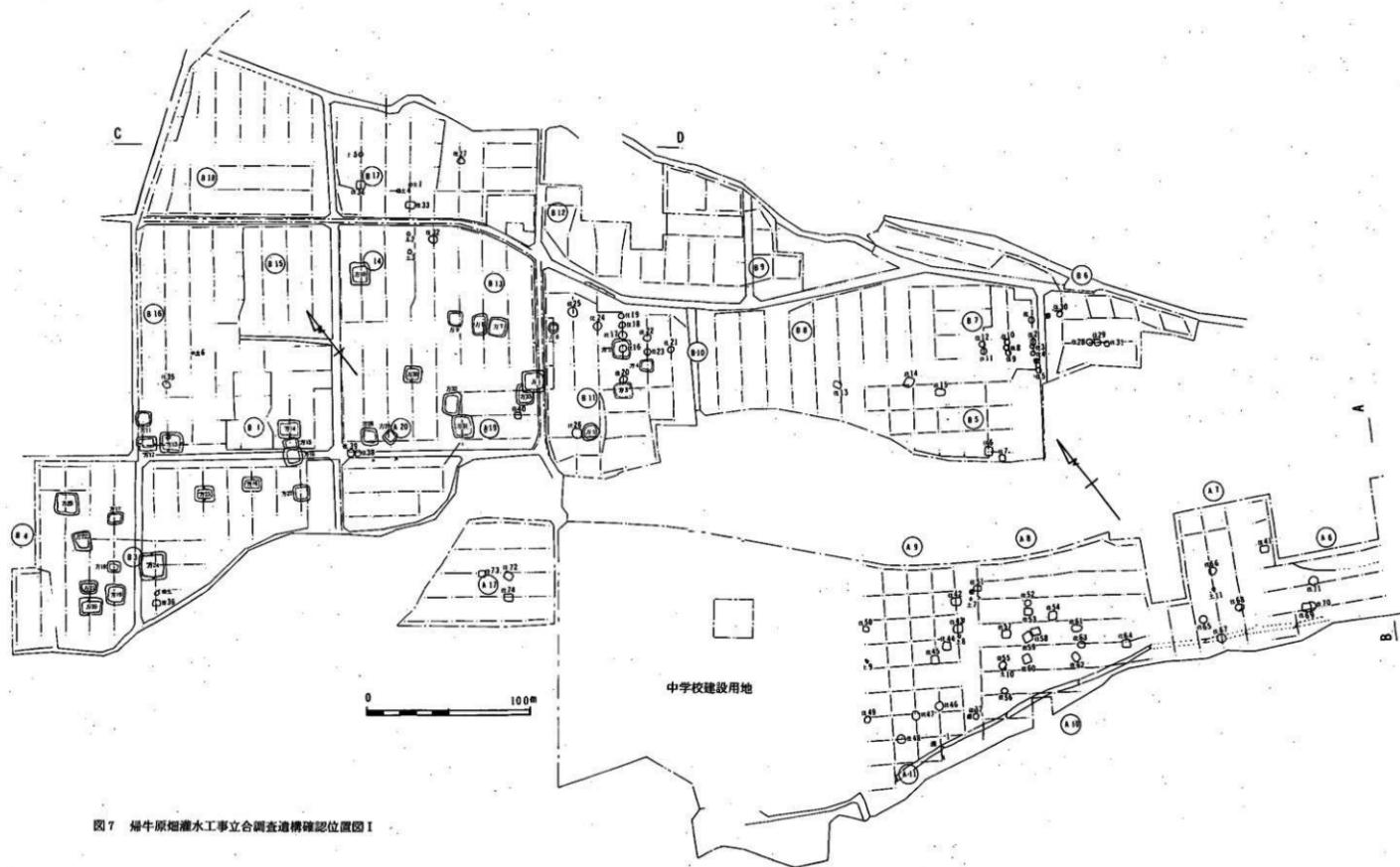
帰牛原畑灌水区域全面積は17ha、そこに15m間隔に配管が行われ、それらをつなぐ本線が掘りこまれる。配管はミニバックホーンで掘られたため溝幅50cm（本管は70cm余）深さ70cm以上となり、調査は比較的容易であった。しかし、2月の嚴寒のさ中は上溶けの泥シコには悩まされた。

帰牛原の大半の土層は表面より15~30cmの黒土層の下は5~10cmの暗褐色土層があってローム層となる。遺構はこのローム層に掘りこまれているが、竪穴内部は暗褐色土・褐色土・暗黄褐色土となっており、その判別には容易でないものがあった。

確認された遺構を図7・8・9にその位置を示し、表1にまとめた。

帰牛原遺跡畑灌水工事立合調査遺構確認表（表1）

（例） 1.住居址 住居址番号1…1号住居址、B7…B7配管区、E1・S2…配管東より1通り目・南より2通り目の配管立上り、それよりS7~10.5m…南へ7m~10.5mの間に竪穴の掘りこみがあり、表土から55cmに床面の深さとなる。縄・中・中…縄文中期中葉である。備考には遺物出土・竪穴の状態等を示している。
• A1住~A37→38住~74住と通し番号とした。



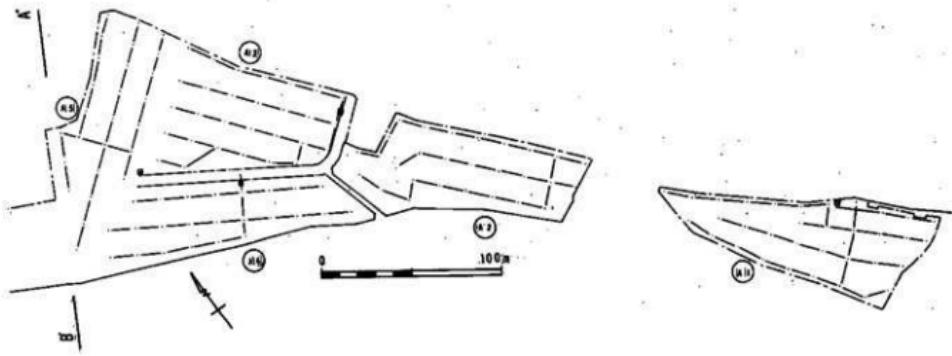


図8 烏牛原畑灌水工事立合調査造構確認位置図Ⅱ

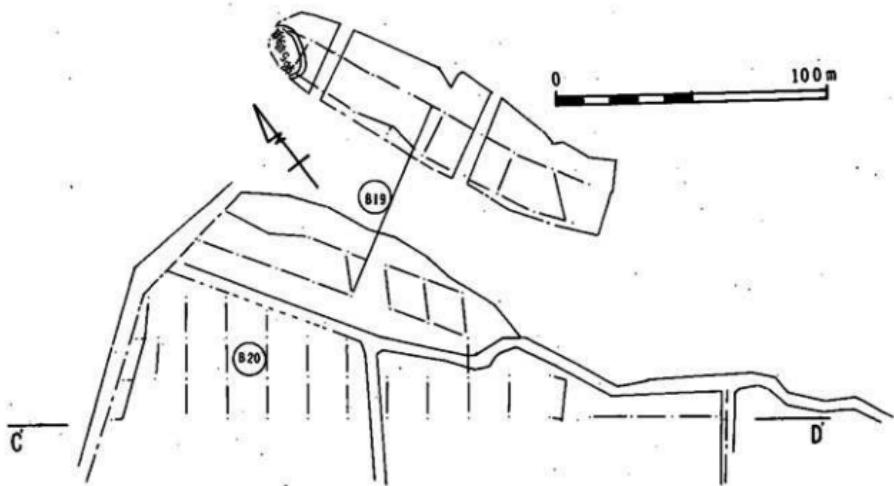


図9 烏牛原畑灌水工事立合調査造構確認位置図Ⅲ (1:2,000)

帰牛原畠淮水工事立合調査遺構確認表(表1)

1. 住居址

住居址 No.	配管区 No.	位 置	深さ cm	時 期	備 考 (出土遺物)
1住	B 7	E 1・S 2 S 7~10.5 m	55	繩・中・中	打石斧 1 土器底部片(勝坂) 10数点。
2	"	E 1・S 1 N 7.5~11 m	55	繩・中	打石斧 2 土器片 3 3住を切る
3	"	E 1・S 1 N 4.8~7.5 m	45	繩・中	2住に切られる 土器片 1
4	"	E 1・S 1 N 1.1~4.1 m	50	繩・中・中	
5	B 7 B 5	本線B 7・B 5の東側中間	45	繩・中・中	土器片 10
6	B 5	E 2・S 1 S 0.6~6.6 m	62	弥・後	" 4
7	"	E 1・S 1 W 5.2~9 m	70	"	土器片 5 (壺) 石鏡 1
8	B 7	E 2・S 1 N 0.3~4.8 m	46	繩・中?	土器片 1
9	"	E 2・S 1 N 5~6.3 m	55	"	土器片小片 東端の1部検出
10	"	E 2・S 1 N 7.2~11.4 m	45	繩・中・中	土器片 1
11	"	E 3・S 1 N 3.3~6.3 m	40	"	打石斧 1 黒曜石片 1
12	"	E 3・S 1 N 6.5~9.8 m	50	" ?	遺物なし
13	B 8	E 1・S 2 N 0.7~4.2 m	50	弥・後?	"
14	B 5	E 5・N 1 W 0.3~4 m	65	" ?	"
15	"	E 4・N 1 S 3.4~7 m	60	" ?	"
16	B 11	E 1・S 5 S 2.6~7.5 m	65	繩・中・後	土器片多 土偶 2片
17	"	E 1・S 6 N 0.9~6.6 m	70	"	" 少
18	"	E 1・S 6 N 8.2~11.5 m	65	"	"
19	"	E 1・S 7 E 0.5~W 3.6 m	50	"	土器片多 石鏡 1
20	"	E 1・S 4 N 4.7~8.5 m	60	" ?	" なし
21	B 10	W 2・N 2 S 4.1~8.9 m	70	"・中・後	土器片 5
22	"	W 1・N 2 S 1~N 4 m	65	"	" 多
23	"	W 1・N 2 S 5.2~10 m	50	"	打石斧 2

住居址 No	配管区 No	位 置	深さ cm	時 期	備 考 (出土遺物)
24	B11	E 2・N 2 S 3.4～8.6 m	45	繩・中・後?	土器片小片
25	"	E 3・N 2 N 0.5～6.2 m	50	"	" 2
26	"	W 2・S 3 W 0.4～E 3 m	45	弥・後	水道工事調査分
27	B12	S 3・W 2 N 2.8～5.3 m	60	繩・後?	床面堅い 遺物なし
28	B6	S 2・W 2 E 0～W 3.9 m	50	繩・中・初	
29	"	S 2・W 2 E 4.2～8.6 m	35	"	土器片多(半截竹管文) 横刃形石器2
30	"	W 1・N 1 S 11.3～15.5 m	60	"	石錐1
31	"	S 2・W 3 W 0.9～2.3 m	55	"	南に向う 土器片2 石錐1
32	B14	E 1・S 4 N 3.5～8 m	60	繩・後?	床面堅い 黒土の落ちこみ帯 打石斧1 土器片1
33	B17	E 1・S 1 N 4.6～8 m	45	弥・後?	張り床
34	"	E 3・S 2 N 1.5～6.2 m	40	"	土器片1
35	B16	W 2・S 1 N 6.5～10.3 m	40	繩・後	土器片2
36	B3	W 1・S 1 N 4.3～8.3 m	45	古墳・後?	床面堅い 土師器1
A1住 37住	A10	本線 S 2・W 1 S 4～8 m	50	弥・後	小片1
A2 38	A20	W 2・S 1 (本線) W 1.7～6.5 m	50	弥・後	土器片1
A3 39	"	W 2・S 1 (本線) W 7～11 m	48	" ?	遺物なし
A4 40	A19	W 3・N 2 E 4.1～8 m	60	弥・後	遺物なし 床面堅い
A5 41	A6	道路より S 31～34.6 m	55	繩・中	土器片1 (半截竹管文)
A6 42	A9	N 4・E 1 S 5～10.5 m	45	弥・後	遺物なし
A7 43	A9	N 4・E 1 N 3～8 m	45	"	"
A8 44	A9	N 4・E 1 W 5.2～10.6 m	80	弥・後	土器片2
A9 45	A9	N 5・E 2 S 0.6～N 4.1 m	100	弥・後	大型壺半個体1 カメ " 1 打石斧1
A10 46	A11	E 2・N 2 N 1.5～6.4 m	60	繩・中	土器片1
A11 47	"	S 3・E 3 N 1.0～S 4.3 m	45	"	打石斧1
A12 48	"	N 3・E 4 E 4.5～8.7 m	55	繩 ?	無文片1

住居址 No.	配管区 No.	位 置	深さ cm	時 期	備 考 (出土遺物)
A13 49	A11	W1・S3 E2～W2 m S3.5～N0.9 m	45	繩・中?	床面堅い 遺物なし
A14 50	A9	W1・N3 S3.3～7.2 m	55	弥・後	小片のみ
A15 51	A8	W1・N2 S2.5～6.5 m	60	"	"
A16 52	"	W3・S2 S1.1～5.8 m	30	繩・後?	土器片2 打石斧片2 黒曜石片1
A17 53	"	W3・S1 N4.3～8.8 m	40	弥・後	土器片5 (高坏片1)
A18 54	"	W4・S1 N0.5～5.5 m	45	" ?	床面堅い 遺物なし
A19 55	A10	N2・W2 N2.1～4.2 m	50	繩・後?	住居址西に向う 土器片2 打石斧片1
A20 56	"	N3・W4 W-N0.8～3 m E-N1.3～2.4 m	55	繩	西に向う
A21 57	"	N1・W2 N4.5～W1.3, S4.2 m	55	弥・後	炉ガメ 土器片多 打製石磨丁1
A22 58	"	N1・W3 E0.3～6.3 m	50	"	土器片5
A23 59	"	N1・W3 E0.5～W4 m	45	"	土器片2
A24 60	"	N2・W3 N4～9 m	55	"	" 3
A25 61	"	N1・W5 E3～W3 m	45	繩・前・初	オセンベイ土器片1
A26 62	"	N2・W5 S7～10 m	45	弥・後	西に向う 土器片2 打石斧1 横刃1
A27 63	"	W5・N1 S0～2 m東に向く	45	繩・後	土器片5
A28 64	"	W7・S2 N1.3～S3.7 m	60	弥・後	壺片2(無文) 石鍬折1
A29 65	A7	W1・S2 N1.7～6.2 m	40	繩・中・中	十万山地区調査分(B3住)
A30 66	"	W2・S3 N0.7～4.1 m(W) N0.3～4.5 m(E)	35	"	" (B10住)
A31 67	"	W2・S1 N3.9～7.3 m	45	繩・中・中	西に向う 土器片1
A32 68	"	W3・S3 S6.6～8.6 m	35	"	西に向う 十万山地区調査分(B8住)
A33 69	A6	W2・S1 E5～10.1 m	55	弥・後	70住を切る
A34 70	"	W2・S1 E10.1～13 m	40	繩・中・中	土偶頭部? 69住に切られる
A35 71	"	N2・W3 W3～E2.3 m ～N3.7 m	50	"	土器片採多く弥・後あり 打石斧4 横刃1
A36 72	A17	S3・E3 E1.1～4.3 m	50	弥・後?	床面に灰・炭あり。堅い 遺物なし
A37 73	"	S3・E4 E0.4～5.2 m	40	"	"

住居址 No	配管区 No	位 置	深さ cm	時 期	備 考 (出土遺物)
A38 74	A17	S 2・E 3 E 0.5～6.8 m	45	弥・後?	床面に灰・炭あり、堅い 遺物なし

2. 溝 坑

1	A10・11 A7・6	段丘南縁の東西方向の溝 幅2～3m	65 90	弥・後?	石鍬1
---	----------------	----------------------	----------	------	-----

3. 土 坑

1	B17	E 1・S 2 N 3～4.8 m	70	中世?	陶片1
2	B14	E 2・S 4 N 8.5～10.5 m	50	"	
3	"	E 2・S 4 S 0.5～2.5 m	55	"	土器片2 陶片1 石を組む
4	B17	E 1・S 2 W 6.8～9.1 m	60	不明	
5	"	E 3・S 3 N 6.8～9.1 m	70	近世?	近世陶片2
6	B16	W 3・S 3 N 11.2～12 m～E 1.7 m	50	繩・後?	大形打石斧1
A±1 7	A8・9	本線、道路より S 23.7～25.2 m	50	弥・後	石鍬1
A±2 8	A9	N 4・E 1 S 0.3～1.5 m	40	不明	遺物なし
A±3 9	A9	S 1・W 1 N 3～4.9 m	60	弥・後	土器片(無文)3
A±4 10	A10	N 2・W 2 N 0.2～1.7 m	65	不明	遺物なし
A±5 11	A7	W 2・S 3 S 5～6.1 m	75	繩・中	土器片3

4. 方形、円形周溝墓

No.	配管区 No	位 置	深さ cm		備 考
			1	2	
1	本線 B13・A19	本線A19 E 1・S 3 S 1～N 1 m, N 11.3～12.4 m	75	75	
2	B11	E 1・S 5 E 1・S 6 N 4～5.3 m, N 0.2～S 0.9 m	70	75	
3	"	E 1・S 4 N 3～4.7 m S 5～6.5 m	90	85	
4	B10	W 1・N 3 N 1.6～3 m S 3.4～4.8 m	80	80	
5	B11	W 2・S 3 E 3.5～4.3 m E 11.5～12.3 m	60	60	円形、水道工事調査分(中原Ⅲ号)
6	"	W 1・N 3 W-S 2.5～3.5→11.5～12.3 m E-S 3.3～4→7.5～8.5 m	55	55	円形、第1次調査分(中原Ⅱ号)
7	B13	S 3・E 3 S 0.3～1.3 m S 2・S 3 W 1～7, 1～8, 2 m	70	70	
8	"	E 3・S 3 E 1.5 m～2.5 m-N 5.5～6.5 m S 4.2～5.3 m-W 5.8～6.8 m	53	53	

No	配管区 No	位 置	深さ cm		備 考
			1	2	
9	B13	E 4・S 3 S 3～4.2 m, N 4～5.2 m	80	80	
10	B14	E 4・N 3 N 4.8～6.2 m, S 5.1～6.3 m	60	70	
11	B1	W 1・N 1 S 1.5～2.7 m, N 4.0～N 5.2 m	55	55	
12	"	W 1・N 1 S 10.1～11.3 m W 1・S 1 E 7.1～8 m	65	70	1次調査分(中原I号)
13	"	W 2・S 1 W 3.9～5.2 m " S 3.1～4.3 m	65	65	主体部 N 4.3～5.2 m (-50cm)
14	"	E 2 西道路より N 8.6～9.7 m, 17.5～18.7 m	60	60	
15	"	E 2 西道路より N 7.6～8.5 m 南は方16につく	65	65	
16	B1 本 B2 線	南北方向 農道より N側 19.5～21.5 m→28.6～30.2 m S側 19.0～20.5 m→28.9～30.6 m	100	110	高环片、カメ底部
17	B3	W 2・N 3 N 0.9～1.9 m→S 4.2～5.3 m	60	60	
18	"	W 2・N 5 S 0～1.2 m→S 5.2～6.2 m	65	65	
19	"	S 2・W 2 S 3・W 2 N 3.8～5.2 m→N 0.4～1.6 m	75	80	
20	"	S 2・W 1 S 1.1～2.2 m→N 5.5～7.9 m	70	80	
21	"	S 3・W 1 S 3.2～4.6→N 2.2～4 m	80	80	
22	"	N 4・W 1 S 5.7～6.7→北西に司う	65		
23	B2	W 3・N 2 N 2.4～3.6 m→S 4.3～5.6 m	70	100	弥生後期土器片 2
24	B3	N 2・E 3 N 7.2～8.3 m→S 7.2～8.3 m E 4～5.2 m	65	70	主体部 N 3.2～5.5 m (-45cm)
25	B4	E 1・N 3 N 0.4～1.6 m→12.8～14.1 m	65	65	
26	B2	W 5・N 2 N 0.8～1.9 m→7.4～8.6 m	60	60	
27	"	E 1・N 2 S 5.5～6.8 m→N 1.4～2.6 m	65	70	
28	A20	S 1・W 2 W 0.7～E 0.4 m→E 6.7～7.7 m N 6.4～7.6 m	65	65	
29	"	S 1・W 3 S 1.3～W 1～2 m→E 0.8～1.9 m N 6～7.5 m	60	70	
30	"	W 4・S 3 N 7～8.2 m W 4・S 4 N 0.6～1.8 m	70	70	
31	A19	W 1・S 2 N 0.6～S 0.7 m W 1・S 1 N 1.7～2.9 m	70	70	
32	"	W 1・S 3 S 0.2～2.2 m→E 0.9 m	80		方31号に南はつく
33	"	W 1・E 2 E 5.1～6.3	75		方1に東と南はつく

都5号墳周溝

No.	配管区 No.	位 置	深さcm		備 考
			1	2	
	B19	W1・N1→南東にカーブ W1・N2→E1~4m	120		道路改修時に大半は切られるが 周溝の存在を認める

烟灌水工事立合調査により確認された遺構は表1のとおりであり、これら遺構を配管区分・時代別にみると表2となる。これによって帰牛原における時代別集落のあり方、方形周溝墓群の墓域の立地を考察する手掛りを得られるものと思われる。

1. 繩文時代

縩文前期初頭とみるA10区61号住居址の1軒のみの検出で、その集落については不明である。出土したのはオセンベ土器の2片のみではっきりしていない。

中期初頭の住居址は、中原の東端部近くのB6区に4軒、B7区に10軒が検出されており、さらには用地外の東側に集落は展開しているものとみられる。土器(図15の4~8)は連続爪形文、縩文、平行沈線文をもつ梨久保式に比定されるものである。石器(図16の4・5)は横刃形石器が検出されている。

中期中葉末から中期後半への過渡期の住居址は十万山地区のA6区~A11区に立合調査と、前発掘調査(図6)の住居址数は19軒となり、この区域に集落の展開をみると、細陰線文土器を主体に井戸尻式土器を伴出するものである。図示(図10)は第4次調査の土器である。図15の28は土偶頭部ともみるが立合調査で検出されている。

中期後半II期の住居址は、B10区・B11区に10軒が検出されている。東の縩文中期初頭の集落の間のB8区・B9区には縩文期の遺構ではなく、また西のB13区・A19区には縩文期の遺構なくなる。B10区・B11区に集中して後半II期の集落は展開されている。

遺物(図15の1~28) 土器は深鉢で、口縁の強く内湾するキャリバー形となる1・13、僅かな内湾を示す10・15がある。文様には口縁部が無文帯の1、縩文のみの10・15、渦巻文による区画文をもつ10・14・18等がある。地文に縩文と綴の条件をもつがあり、後者に太い粘土紐の懸垂文を下す1・3があり、前者は沈線による懸垂文を施す20・23・24があり、東海地方との関連の強い土器である。また縩文のみの土器もみられる。石器(図16の2・3・6・7)には打石斧、石鍬の出土をみ、16号住居址より(図15の25・26)土偶頭部片と脚部片の出土をみていく。

縩文中期後半III・IV・V期は立合調査区域内ではなく、城本屋地区に集中(図5)して計45軒が発掘調査されており、III期(図11)・IV期(図12の1・2)、V期(図12の3~6)の好資料の出土をみていく。

縩文後期では、段丘北面の1段低位の黒土の堆積の深い地域B12区・14区・16区と中学校建設用地に接したA8区・10区に分散した状態に住居址がみられ、中学校用地内に5軒、城本屋地域では3軒が発掘調査され、その集落は小規模に分散して構成されたものとみる。

遺物は少ないが、城本屋地区の土器(図12の7~11)は後期前半堀之内II式に比定されるもので、他の地区出土土器(図1の27)は無文の粗製土器のみである。石器(図16の8・9)は大形化打石斧が検出されている。

2 弥生時代

弥生時代中期初頭には十万山地区V-1号土坑がある。第1次調査時に発掘調査したもので寺所式(図13の1~15)に比定される鉢・小形壺と石鏡の出土をみている。鉢は条痕文の伝統を強く残すもので、口端は連続押圧が施され、条痕文は貝背による横位・斜位・羽状がある。4の小形壺は胴下部は無文、13は肩部とみられ、12は壺の頸部で繩文と沈線がみられる。

城本屋地域の発掘調査では阿島式に比定される住居址が検出されているが1部分調査ではっきりしないが、磨消繩文に沈線を施す土器が検出されている。

弥生後期集落は、十万山地域を中心としたA6区~A10区に中心をもち、27軒の住居址が検出調査されている。さらに段丘中央部の低地帯を隔てた北側、B5区に小集落が、段丘北側の一段低位となるB17区に、また、中原と南原を切る谷に面した南のA17区北のA19・20区にも分散の住居址がみられている。これらは弥生後期にみられる集落のあり方を示すものとして注目される。

遺物(図14・図17・図13の6) 土器は中島式を主体にし、壺・小形壺・台付壺・甕・高杯がある。図13の16の大形壺は以前耕作中に出土したもので、出土位置からみると方形周溝13号とみられる。図17の2は立合調査確認の45号住居址出土で、中島式終末期である。十万山地域発掘調査の遺物は図14であり、甕には波状文と斜行短線文の組み合わせをなす中島式前半と、無文化する後半のものがある。11の台付小形壺は長床式に比定されるものである。立合調査確認(図17)の45号住居址出土の1の甕・57号住居址出土の3の炉盤は東海地方の土器とみられる。石器の量は減少を示し、十万山地区発掘調査では有肩肩状形石器・磨製石庖丁・打製石庖丁・環石があり、石鏡とみるは2つにすぎず、立合調査では石鏡の出土をみた住居址は9号住居址と64号住居址のみで、他は土坑と溝址より各1つ(図17の10~12・15)が検出されたにすぎない。打製石庖丁は57号址と中学校用地内8号址より出土をみている。

十万山地区で特筆すべきは図14の14のB9号住居址床面出土の6孔をもつ銅鏡がある。

弥生後期中島期の方形・円形周溝墓群は、段丘面中央部の低地帯から浸蝕崖に面したB11区・B13区・B14区・A19区・A20区・B1区・B2区・B3区・B4区に33基が検出されているが、1次調査に発掘された6号(図2)・12号(図3)、5次調査で発掘された5号が含まれている。これらの他に昭和47年度畜木第一小学校建設に伴う発掘調査では方形周溝墓5基と、1号につながる溝は方形周溝墓をなすとみると計6基(図4)が調査されており、この中、南原1号よりは中島式臺形土器2個体が周溝底部より横倒しの状態で出土をみている。また12号方形周溝(中原1号)の東側の13号方形周溝墓は、耕作中に出土した図13の16の大形中島式壺の出土位置と一致している。他の周溝墓出土の土器は中島式の小片のみであるが、弥生後期中島期の方形・円形周溝群とみられる。

3 古墳時代・平安時代・中世

古墳時代とみる住居址は、中原台地南西縁部のB3区に1軒が検出されているが、土師器1片の出土であり、はたしてこの期の住居址とは疑問がある。中原1号・2号古墳に接する場所にあり、注意される。

平安時代住居址は城本屋48号があり、国分式完形の甕(図12の12)の出土をみているが、48号住居址以外にこの期の遺構は発見されていない。おそらく用地外の北と東側に集落が存在したものと推定される。

中世住居址は、中学校建設用地内に3軒が発掘調査され、中原台地北側の低地帯に土坑3基が検出されており、中世後半のものである。竜東段丘面にみられる知久氏の出城または砦の存在が考えられるもので

ある。

郭5号古墳は、中原段丘崖の中腹にあり、昭和38年8月道路開鑿工事中に朝顔花形円筒埴輪・円筒埴輪の完形品の出土をみている。埴丘は崩されてないが、B19区の配管溝が掘られ、溝を拡張し、幅3m、深さ120cmの周濠が西に向って円を画く(図9)を確認した。

帰牛原畠塚水配管別・時代別遺構検出一覧表(表2)

例(-2)…前発掘調査が配管工事で再調査されたもの

配管区 No	住居 址数	縄文時代					弥生時代		古墳 時代	土坑			方形・円形 溝基
		前・初	中・初	中・中・末	中・後半	後期	中	後		縄	弥	中世	
A 1	0												
A 2	0												
A 3	0												
A 4	0												
A 5	0												
A 6	4			3				1					
A 7	4			(-2)						1			
A 8	4						1		3				
A 9	5								5			2	1
A 10	11	1					2		8				1
A 11	4			4									
A 17	3								3				
A 19	1								1				3
A 20	2								2				3
B 1	0												(-1)
B 2	0												6
B 3	1												7
B 4	0												1
B 5	4								4				
B 6	4		4										
B 7	10		10										
B 8	1								1				
B 9	0												
B 10	3				3								1
B 11	8				7				(-1)				(-2)
B 12	1						1						4
B 13	0												1
B 14	1						1					2	
B 15	0												

配管区 No	住居 址数	縄文時代						弥生時代			古 墳 時 代	平 安 時 代	土 坑			方 形・円 形 周 溝 墓
		前・初	中・初	中・中	末	中・後半	後期	中	後	繩			中	不	明	
B 16	1						1					1				
B 17	2								2			1		1	1	
B 18	0															
B 19	0															
B 20	0															
中学用地 内調査	9						5		1			3				
計	(-3) 83	1	14	(-2) 11	10	11		(-1) 32	1	3	3	2	3	3	(-3) 33	
城本屋 調査 中原・下原 前調査	51 17				45	3	2		7		1				3	
合計	148	1	14	19	55	14	2	38	1	1	3	6	4	4	11	39

IV ま　と　め

帰牛原段丘面には南原・中原・十万山地区・城本屋等の遺跡に分れているが、同一段丘上に立地し、遺跡の関連性からみて区別しがたい条件にあり、これらを総称して帰牛原遺跡群と総称するが妥当である。(図18)

帰牛原における発掘調査は1970年度農道開設に伴う農道用地内調査、1972年度喬木第一小学校建設用地内調査、1976年度城本屋地区農業改良事業に伴う調査、1978年度十万山地区農業改良事業に伴う調査、1979年度水道貯水池建設による調査、1980年度畑灌水工事による立合調査、1981年度喬木中学校建設用地内調査と続き、帰牛原遺跡群のほぼ全貌を知ることができた。

帰牛原遺跡群の立地をみると、段丘面中央部のくびれ部より東側は扇状地形をなし、今次立合調査によるA 1区～A 5区にかけては遺構・遺物は検出されていない。この中央のくびれ部の北東滝ノ沢の崖端浸蝕による深い谷によって切られた舌状台地に城本屋遺跡があり、1976年調査により、集落南側の縄文中期後来住居址が、それ以後の時期の氾濫によって切られていることが確認された。

それより西の台地中央部を東西方向に低地帯が走り、南原と中原とに分けている。この低地帯は滝ノ沢崖端浸蝕進行前は東方の丘陵地帶涙の湧水の流路をなしていたと推定される。この旧流路をはさんで集落は展開されている。

帰牛原段丘上の集落のあり方をみると、滝ノ沢の崖端浸蝕の終わる地点をはさんでの城本屋地区には縄文中期後半Ⅲ期・Ⅳ・Ⅴ期にわたる大集落があり、城本屋の西に続く中原の東端部B 6区・B 7区には縄文中期初頭の集落があり、それより180mの間隔をおいたB 10・11区には縄文中期後半Ⅱ期の集落の展開を見る。中央部低地帯の南の十万山地区には縄文中期中葉末から後半期への過渡期を示す大集落が展開して



图18 牛原道路群地形群细图，主要配管区位置及古槽分布图 (1 : 7,500)

いる。

縄文中期集落は同一段丘上に、同時期の集落は分散して構成されるものでなく、同一区域内に集落を形成する血縁共同体であったことを知るものである。伊久間原遺跡群においては谷頭浸蝕の終わる地点を中心とした西側の同一区域内に連続して縄文期集落が形成されていたものとは対象的である。⁽¹⁾

帰牛原における縄文中期集落形成の位置が4転されていることは、おそらく中央低地の旧流路の変化による自然的環境によるものと推測される。

縄文後期では城本屋区域に城ノ内式の小集落の存在がみられ、中学校建設用地内と中原北の下段面に住居址の分散がみられるが、それら出土土器は無文土器であり、その時期は決めかねるが、後期集落は小規模となり、分散の傾向をもつものと思われる。

弥生時代では、中期初頭寺所式土器の出土をみたV-1号土坑、城本屋地区での1部調査された阿島式とろる住居址があるが、その集落については不明である。

後期中島式の集落は十万山地区を中心に展開され、中心となる住居址より銅鏡の出土をみている。さらに集落は中央部低地帯を隔てた中原地区のB8・9区、台地西の浸蝕谷に面した南側のA17区、北側のA19等に分散の小集落の形成がみられ、農耕とともに生産の拡大による分散の役割をもったものと受けとめたい。

方形・円形周溝墓群の段丘縁部に展開する状態は重視される。小学校建設用地内に5基ないし6基の発掘調査、第1次調査時の2基に加え中原段丘面での畑灌水工事立合調査により確認された総数は39基を数える。これら周溝墓が段丘西端部を切る崖頭浸蝕谷に面して構築され、これら範囲内には弥生後期住居址は、外周に僅かに点在するのみで、墓域として設定されていることが注目される。

周溝構築の時期は、出土遺物は少なく、発掘調査において南原1号方形周溝墓東周溝内出土の中島式壺の2コ体分と、13号出土とみる大形壺(図13の16)が主なものである。立合調査において検出された小片は、いずれも中島式であり、弥生後期後半の周溝墓群とみる。

これら周溝墓群構築の背景をなすものは、帰牛原段丘面弥生後期の集落だけのものではない。おそらく段丘崖下の沖積段丘面に展開する阿島・加々須川以南遺跡、馬場平遺跡をはじめとする小川川流域の遺跡群、さらには、同一段丘面に大集落の展開をみた伴ノ原・城原・伊久間原遺跡群との関連に築かれた墓域と受けとめられないであろうか。今後に残された課題である。

古墳は中原段丘西端部に中原2号古墳が現存し、埴輪片・直刀・刀子・須恵器の出土が「下伊那史3巻」に記載されている。この南に中原1号墳があつたが消滅している。古墳時代の造構は中原南西縁部に36号住居址が立合調査で検出されているが、土師器片1点の出土であり、消滅した1号墳の遺物混入ともみらはれはつきりしない。これ以外には古墳時代の造構は発見されていない。

平安時代では城本屋地区で48号住居址が発掘調査され完形の国分式の壺の出土をみている。この期の集落は、48号住居址の位置からみて用地外の北と東に展開されているものと思われる。

帰牛原における6次にわたる発掘調査と、全面にわたる立合調査によって帰牛原遺跡群の集落構成のあり方を知ることができ、また、南原・中原の西部を中心とした方形・円形周溝墓群の存在は重視すべきであり、これらを中心として遺跡の保存に万全を期すべきを強調したい。

おわりに、立会調査にあたって灌水工事を請負われた平和工業KKの御理解・協力があり、作業にあたられた方々の狭い配管溝の中での造構・遺物の検出に、また上解けの泥だらけになった作業の日も多い中で、献身的に協力いただけたことを深謝したい。

- 注 1. 喬木村教委 伊久間原 1978・3
" 伊久間原遺跡 II 1980・2
注 2. 市村成人 下伊那史第三巻 昭 30・12

(佐藤 雄信)

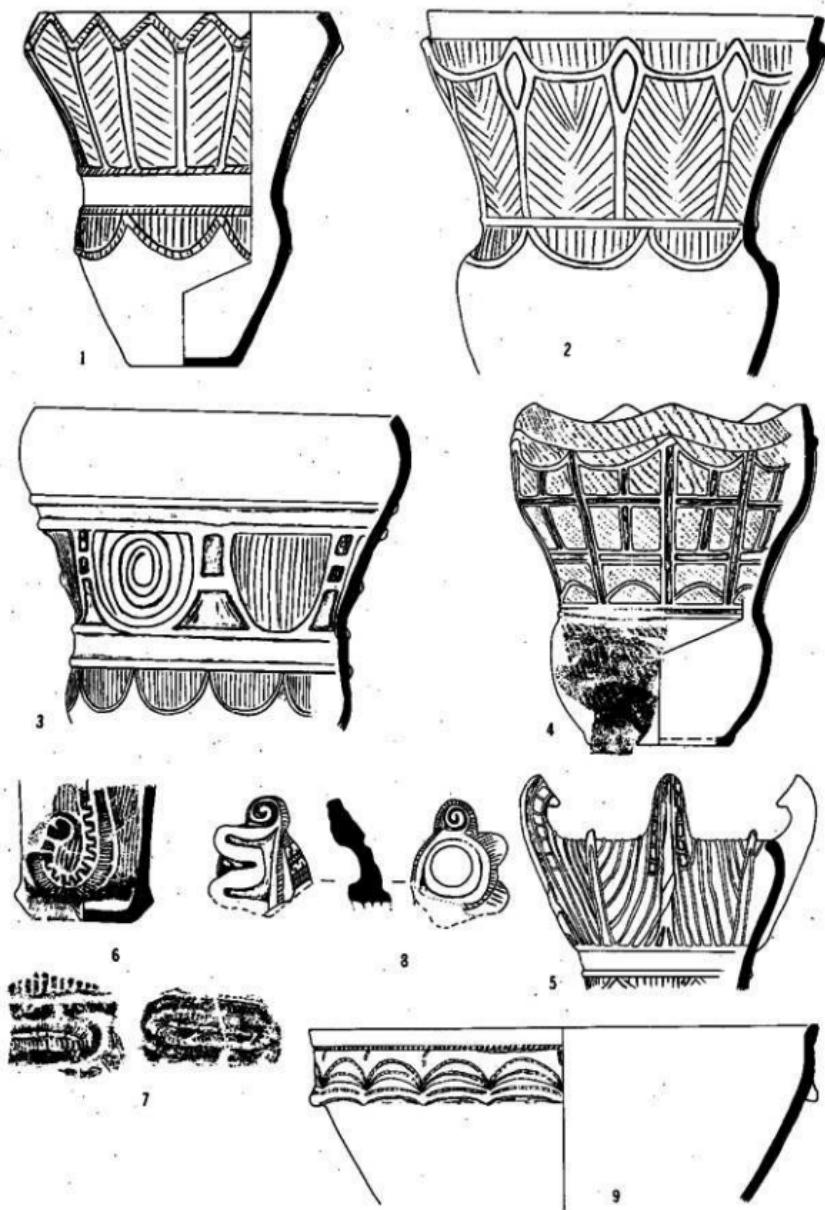


图10 十万山地区出土编文中期中叶末土器 (1 : 4)

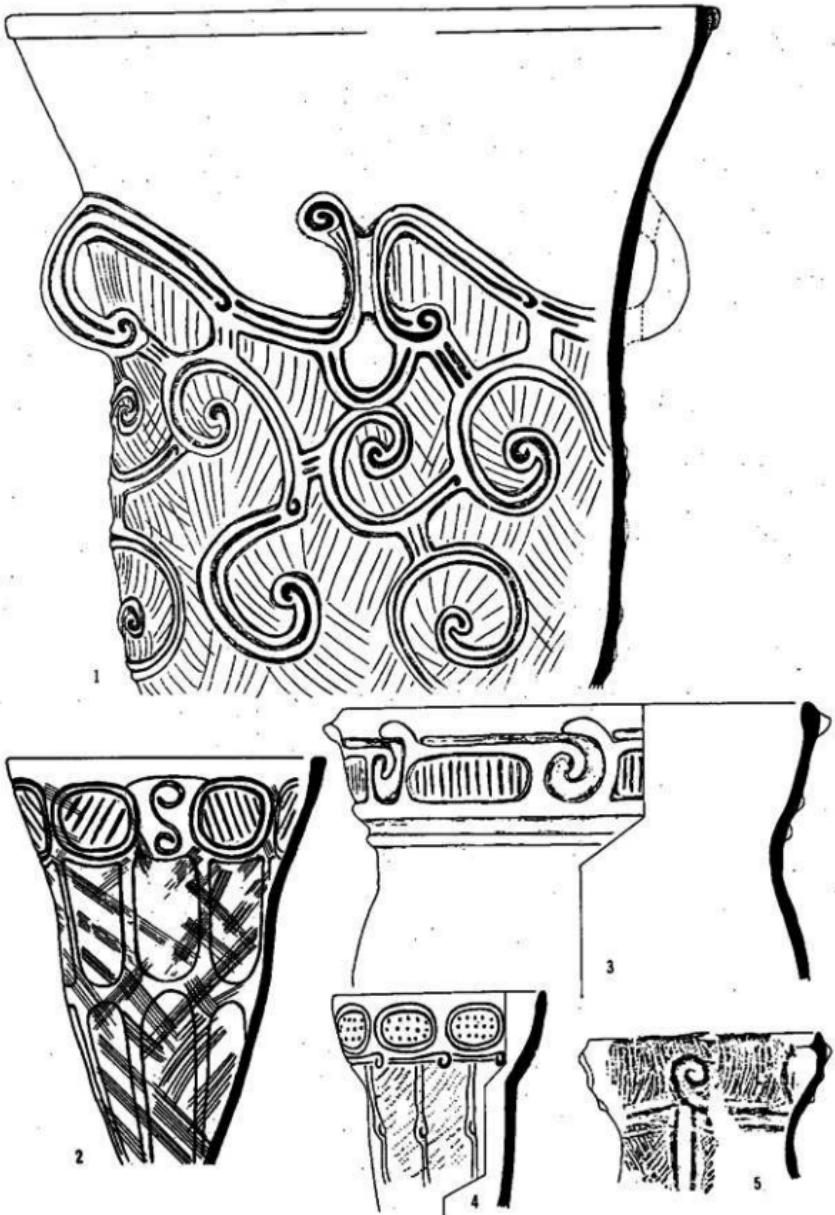


图11 城本屋地区出土绳文中期後半Ⅲ期土器 (1 : 4)

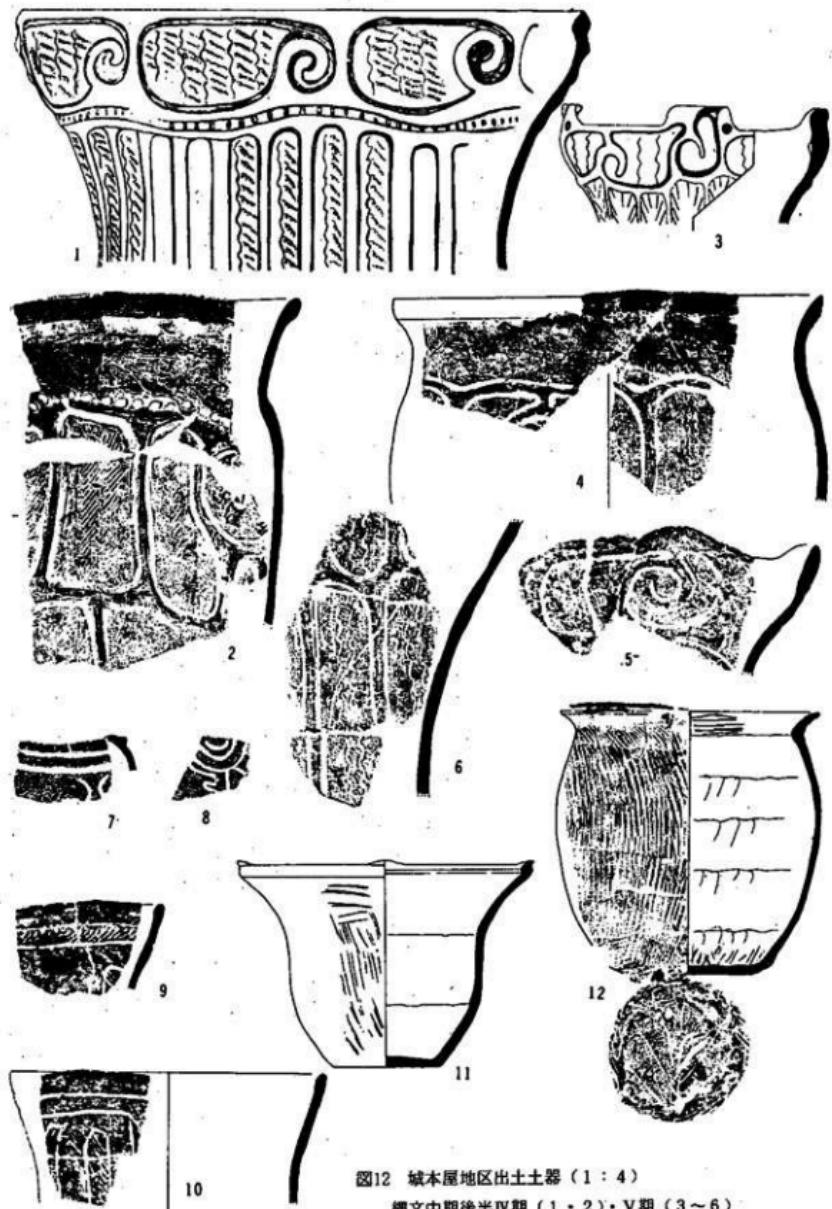


図12 城本屋地区出土土器 (1:4)

縄文中期後半IV期 (1~2)・V期 (3~6)

縄文後期 (7~11)・平安時代 (12)

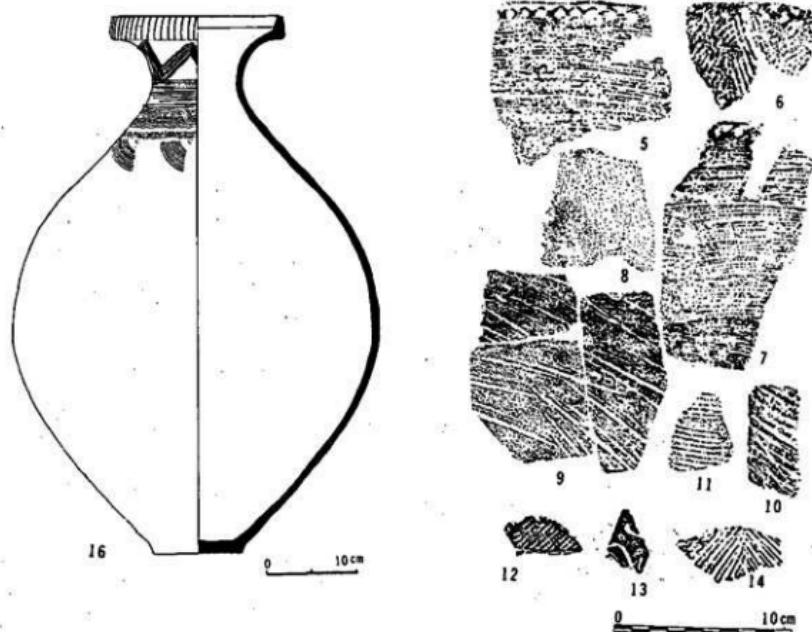
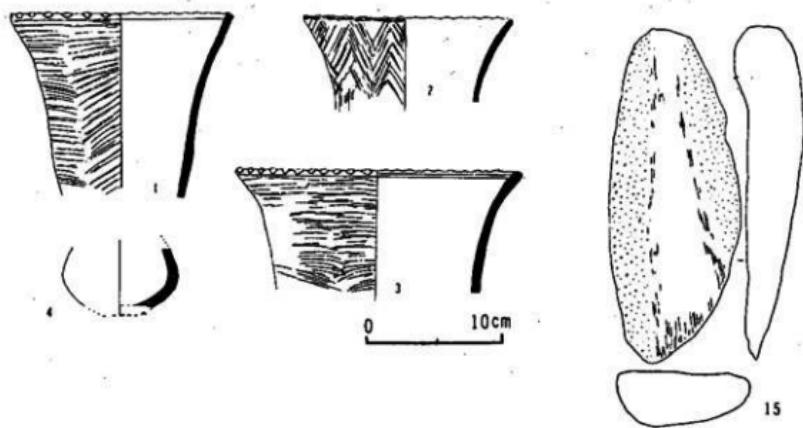


図13 堀牛原遺跡出土弥生中期・後期遺物

1~15…弥生中期土坑V-1号 (1~4…1:4, 5~15…1:3)
16……弥生後期中島式大形壺 (1:6) …方形周溝23号 ? 出土

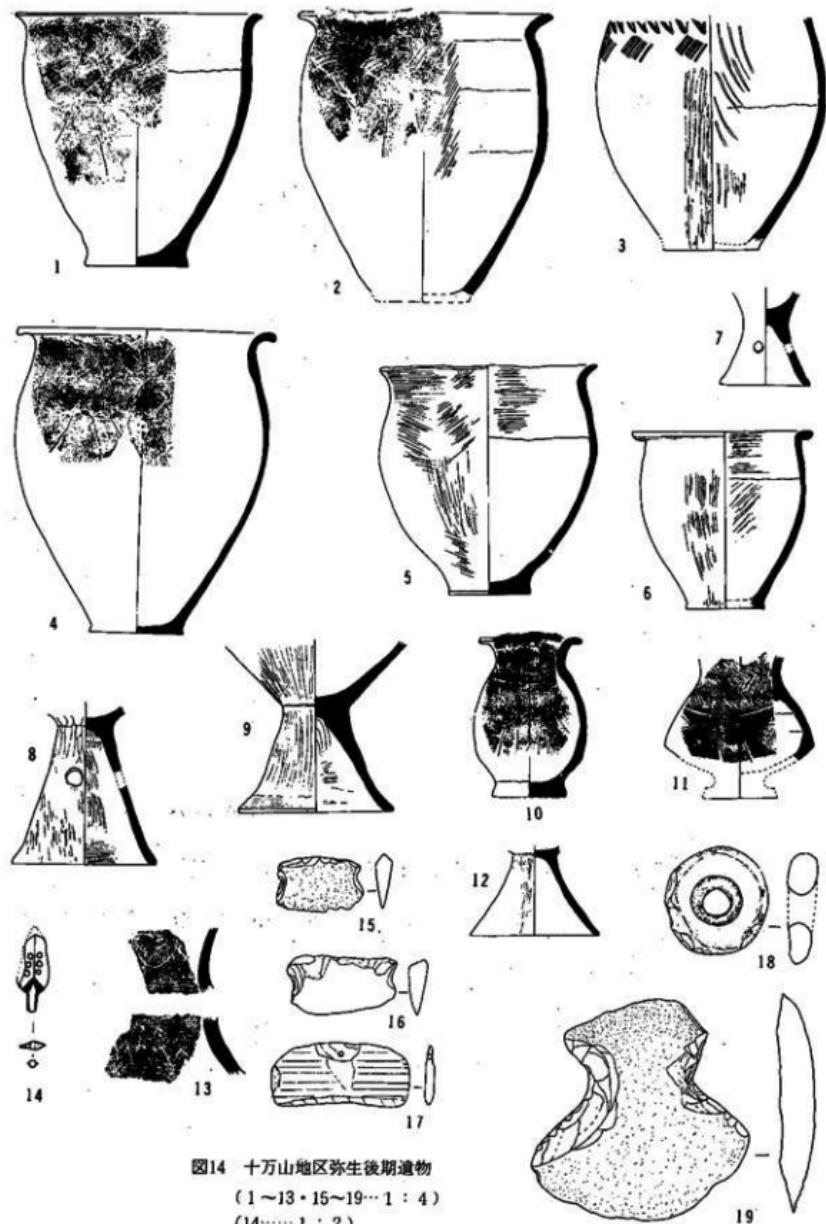


圖14 十萬山地區弥生後期遺物

(1~13·15~19···1:4)

(14···1:2)

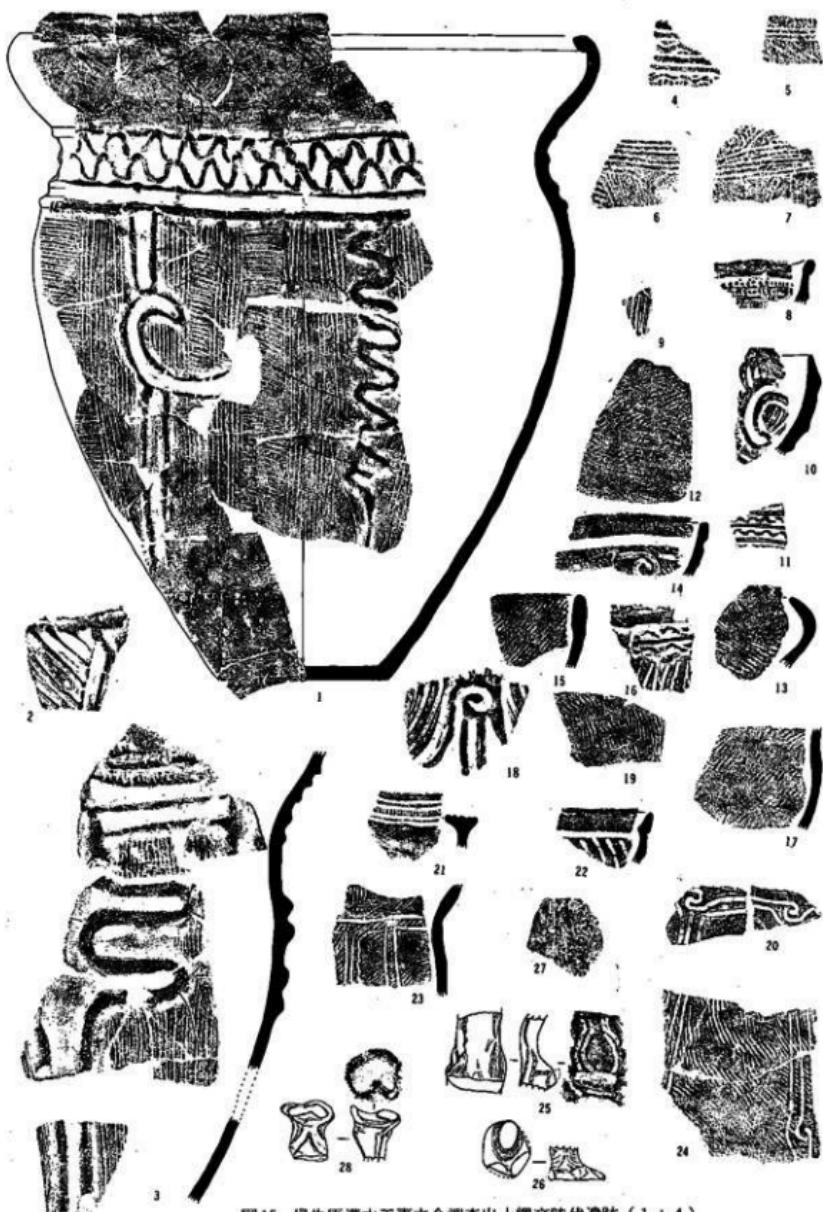


图15 烤牛原灌水工事立合調査出土縄文時代遺跡 (1 : 4)

1~3・25・26……16住, 4~7……29住, 8……5住, 9……41住, 10~12……19住,
13~20……22住, 21~23……23住, 24……21住, 27……35住, 28……70住

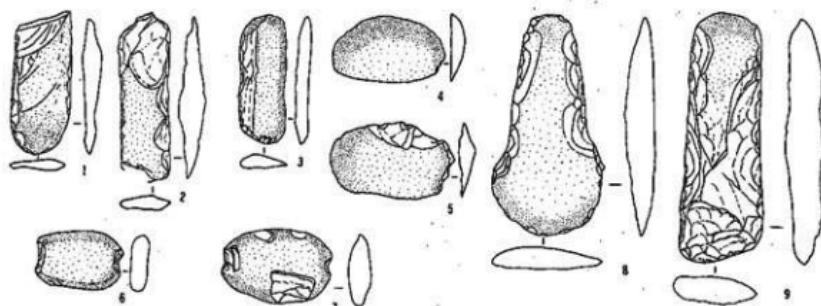


図16 場牛原灌水工事立合調査出土縄文中・後期石器 (1:4)

1……1住, 2・3……23住, 4・5……28住, 6……19住, 7……31住, 8……32住, 9……土6

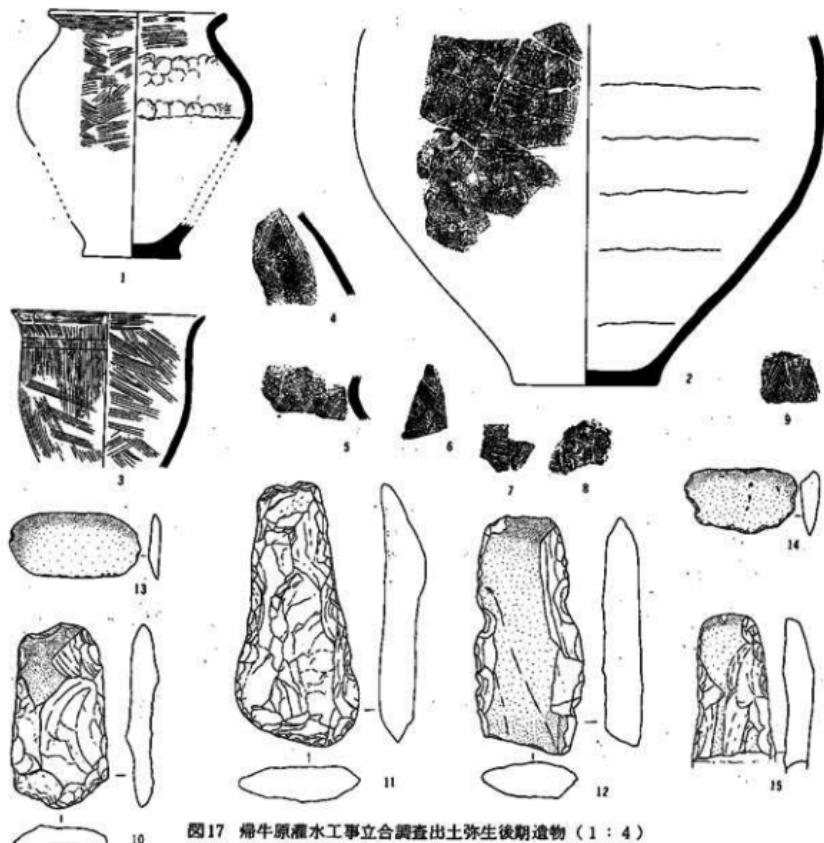


図17 場牛原灌水工事立合調査出土弥生後期遺物 (1:4)

1・2……45住, 3～5・13……57住, 6……58住, 7・8……44住, 9・10……7住,
11……溝址1, 12……土7, 14……中学校用地8住, 15……64住

図版 I 遺 跡



帰牛原遺跡群 東より



帰牛原遺跡群 東より

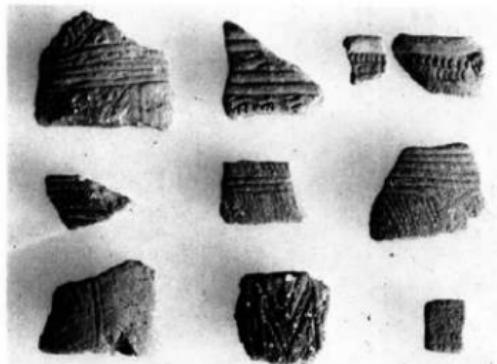


帰牛原遺跡群 十万山地区

帰牛原遺跡群 十万山地区工事終了後



図版Ⅱ 遺 物



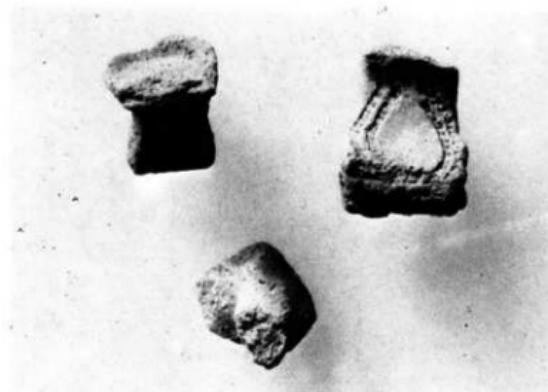
縄文中期初頭の土器



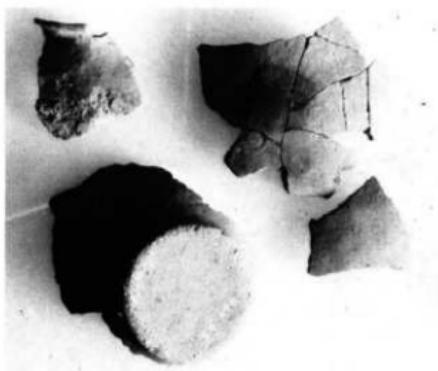
縄文中期後半 II の土器



縄文中期後半 II の土器



縄文中期後半の土偶



弥生後期の土器



弥生後期の石器



A 21 号 (57号) 住居址炉盤 ①



A 21 号 (57号) 住居址炉盤 ②



A 21 号 (57号) 住居址炉盤 ③

図版Ⅲ 立合調査スナップ



A 21'号(57号)
住居址の炉址検出



配管溝の調査①



配管溝の調査②

調査組織

1. 烟牛原遺跡調査委員会

小池 敬次	喬木村教育委員会委員長
下岡 輝男	喬木村教育長
矢沢 宮治	喬木村教育委員
木下 堅固	"
村沢 百三	"
原 五郎	喬木村文化財保護委員長
大平 和男	中原烟牛原烟窯実行委員会委員長

2. 調査団

團長 佐藤 雄信

3. 事務局

原義顕	喬木村教育委員会総務係長
鶴崎和男	" 社会教育係長
城田朝雄	" 社会教育係
額嶺政恒	" 派遣社会教育主事

4. 作業員

牧内住子	北林重実	福島明夫	中平兼茂
柳沢八重子	佐藤いなゑ	田口さなゑ	

おわりに

小渋川より取水した水を竜東一貫水路として松川町生田・豊丘村・喬木村・飯田市下久堅の中段地帯を通し、畠地帯に灌水して農業の近代化と生産の向上を図るための県営小渋川畠地帯総合整備事業が年次計画で行なわれ、昭和53年度には伊久間原地籍の畠灌工事が行なわれました。引続いて昭和55年度には阿島帰牛原中原地籍の畠灌工事が実施されることになり、村では南信土地改良事務所との協議、調査組織の編成等を行ない調査にあたりました。

帰牛原遺跡は喬木村における伊久間原遺跡に次ぐ大遺跡であり、昭和51年度には帰牛原地区農業構造改善事業の実施に先立って城本屋遺跡を中心に発掘調査を実施し、翌年52年には隣接する十万山地区の発掘調査を行ない「繩文中期末葉の集落を中心とした城本屋遺跡」「繩文中期、弥生後期の集落を中心とした帰牛原遺跡十万山地区」として夫々調査報告書を刊行し、遺跡調査に大きな成果を上げることが出来ました。

今回は同地区に畠灌用配管施設が設置されて12~15m間隔に深さ70cmの溝が掘られ、重要遺跡が破壊される懼があるため全区域に亘って立合調査を実施しました。

調査は南信土地改良事務所の委託を受け、昭和55年度に60万円の調査費、昭和56年度に40万円の報告書作成費の予算付をいただきました。

作業は2月4日より3月28日まで52日間に亘り延138.5工を費やし工事請負業者平和工業(株)の協力を頂いて溝掘りの出来次第に調査にあたりました。

2月の寒風霜を刺す厳寒の中で、狭い溝に入っての不自由な作業や、赤土の凍った堅い土や凍解けの泥シコの中での難儀な作業がありました。又着工期間が遅かった為年度末押し迫っての調査も大変ありました。

城本屋遺跡、帰牛原十万山地区、中原遺跡、帰牛原遺跡の全容を調査出来ましたことは誠に嬉しいことがあります。

調査に当られた佐藤駿信団長、作業員の方々、等大勢の方々のご努力、ご協力に厚く御礼申し上げます。報告書の作成については佐藤先生の深い識見によって立派にまとめて頂きましたことに感謝と敬意を申し上げます。

出土品については関係各庁に届出を終り、喬木村歴史民俗資料館に保管展示しております。

関係各位に大変お世話になりましたことを重ねてお礼申し上げあとがきといたします。

昭和57年2月

喬木村教育委員会

帰牛原遺跡群

昭和55年度 帰牛原畠灌水工事
埋蔵文化財立合調査報告書

- 1982・2 -

長野県南信土地改良事務所
長野県下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 株式会社 秀文社